

佐藤亜沙美 ブックデザイナー

八戸ブックセンターのことを知ったのはTwitterのタイムラインに洗練された店内の様子が流れてきて目にとまったときでした。市営の本屋であることに興味をもったものの「遠くて、なかなか行けないなあ」と思った記憶があります。それからほどなく、八戸ブックセンターのディレクターである内沼晋太郎さんからお声かけいただき、念願かなって伺うことができました。

まず印象的だったのは東京からのアクセスの良さでした。新幹線のなかで仕事のメールを打っていたら、あっという間に着いてしまって慌てて降りたのを覚えています。初めて触れた八戸の方たちは、みなあたたかく少しシャイで、接するうちこの地が好きだなあとじんわり感じ、それまで遠かった八戸が一気に近く、親近感が湧いたように思います。店内はまさに「夢のような本屋さん」という印象で仕事のことを忘れて夢中でなめるように本棚をながめてしまい、仕事で来たのだとハッと我に返ったのですが、そのときに東京で本屋にいる時間は、ブックデザイナーとして仕事との距離が近く、また忙しい東京の時間の流れのなかで追われるように過ごす時間だったのだと、ゆっくりした時間のなかで豊かなひとときをしみじみ過ごしました。店内でなんとなく珍しい本があるなあ、この本がこの棚に入るのかなどとながめていたのですが、あとあと聞いてみるとスタッフである森佳正さんによるクレイジーとも思える圧倒的な質量の知識に裏付けられた本棚の構成だったことを知り、本屋としての奥行きに感動したのです。

わたしは「紙から本ができるまで展」の第1回目のゲストを担当させていただいたのですが、八戸市にある三菱製紙さんの紙を使って一冊の本を作るというその地でしかできない素晴らしい企画で、趣旨に感激して前のめりになって参加しました。三菱製紙さんに工場見学に行ったときは、これまで行っただの工場よりもスケールが大きく、工場で働かれている方たちの情熱に圧倒されて普段手にしている紙がこの人たちの手によってできていると想像するだけでも胸が熱くなりました。

トークイベントでは市民の方々とも触れ合うことができ、東京でイベントといえば、だいたい本に関わりのある仕事の方やデザインに興味がある方が来られることが多いのに対し、本がとにかく好きでというご老人や、絵を描くのが好きという中学生など、多様な参加者とお話をさせていただいたり

するうち、こちらが多くの学びを得る貴重な機会になりました。

そのあとも何度かブックセンターに伺う機会をいただきましたが、春夏秋冬どの季節に訪れてもその時期ごとに風景や食べ物の魅力が溢れていて、また東京からほどよい距離であるためか、いつも開放的な気持ちになってお酒を飲み過ぎてしまうことも多く、とにかく楽しい! という印象しかないのですが、まだ来られたことのない方に伝えたいのは、一度訪れたら大好きになるので是非おんでやんせ!

佐藤亜沙美 asami sato

ブックデザイナー

「紙から本ができるまで展 木村友祐×佐藤亜沙美
×三菱製紙八戸工場」(2017～2018)

「ブックデザイナーの仕様書展」(2019)など

1982年福島県出身。2006～2014年、祖父
江慎氏率いるコズフィッシュ在籍。2014年
独立、サトウサンカイ設立。2016～2019年
『Quick Japan』アートディレクター、2019年
から『文藝』のアートディレクターを努める
ほか、受賞歴も多数。

